地域生活を支える
社会福祉法人
第256回

社会福祉法人 緑樹会［山梨県北杜市］の試み

ニーズをキャッチして率先して仕組みをつくり 地域に密着した実践を行うことで なくてはならない存在に

障がいがある方が活躍する高齢者の困りごと支援、無料の買い物支援バス、外国人職員と地域住民をつなぐアジアン食堂、地域の消防団との連携。「一人一人のために～この地で一粒の麦とならん」を理念に掲げ、地域の声に耳を傾け、ニーズに応え続ける。

緑樹会

法人名
社会福祉法人 緑樹会

本部住所
〒408-0204
山梨県北杜市明野町上手520

URL
https://www.ryokuju.com/

理事長
石井 貴志

事業内容
- 医療施設
ほくと診療所
- 介護保険施設
特別養護老人ホーム 明山荘
個室ユニット型特別養護老人ホーム明山荘
明山荘ショートステイ ＜含予防＞
明山荘デイサービスセンター ＜含予防＞
明山荘小規模多機能型居宅介護事業所
看護小規模多機能型居宅介護事業所きよさとの家
いきいきほくと居宅介護支援事業所
短期入所療養介護施設 ほくと診療所 ＜含予防＞
- 障害者支援
障害者支援施設 グリーンヒルホーム ＜生活介護＞
＜施設入所＞
グリーンヒルホーム短期入所
就労支援事業所 グリーンヒルプロダクツ＜就労継続支援B型＞
グループホームたんぽぽ
いきいきほくと相談支援事業所
生活介護事業所ふらっと
グループホームかなで（日中サービス支援型）
かなで短期入所
グループホームここ
ここ短期入所
- 保育（子育て支援）
ひまわり保育園

特別養護老人ホーム明山荘（山梨県北杜市）

障害者支援施設グリーンヒルホーム（山梨県北杜市）

社会福祉法人 緑樹会の沿革

1975年山梨県北杜市に設立され、1976年に特別養護老人ホーム明山荘を開設。地域の高齢者福祉の基盤となる。

利用者の健康管理を担うため、施設内に診療所を併設。1978年には、障がい者支援施設グリーンヒルホームを開設した。2004年、ほくと診療所として一般外来も開始。

2009年には、職員向けの託児所「ひまわり」を開設し、地域住民からのニーズに応え2019年には小規模保育園として認可され、一般利用も可能となる。

2015年には、「地域支援室」を新設。障がい者支援施設の利用者や職員が、住民の困りごとを解決する体制を整備した。同年、小規模多機能型居宅介護事業所なども開設し、「医療・高齢福祉・障害福祉・保育・地域支援」という5本柱を確立した。今後も地域のニーズに寄り添う存在として、歩み続けている。

社会福祉法人 緑樹会の 理念と方針

［基本理念］
一人一人のために～この地で一粒の麦とならん～
年齢を重ねたり、障がいがあることで、生活しづらいと感じている方がたやそのご家族に、ご自分らしい生活を過ごしていただき幸せを感じていただけますように、緑樹会がお手伝いさせていただきます。ご利用者様、ご家族、法人スタッフが互いに信頼し合い、ともに助け合い支えあって、一人一人が満足し笑顔になれることを大事にしています。また、地域住民の皆様と協力し、地域のみなさんに喜んでいただけるような誰もが暮らしやすい地域社会の実現を目指します。

【一粒の麦とは】
小さな一粒の麦が大きくたくましく成長してやがて多くの実を結んでいくことになぞらえて、はじめは小さな一粒でも、スタッフ一人一人が研鑽をつみ大きく成長して、しっかりとこの地に根をはり地域の福祉を大きく実らせたい、というのが緑樹会創立からの思いです。この地、北杜市で一粒の麦となれるよう、これからもその思いを持ち続けスタッフ一丸となってさらなる努力をしていきます。

［方針］
1. 施設を利用される方、またそのご家族の声に常に耳を傾け、より満足していただけるサービスを提供します。
2. 職員は常に自己研鑽し、福祉施設職員としての自覚を持ち、連携して、より質の高いサービスを提供します。
3. 地域、一般の方々に、法人をより理解して頂けるように情報を発信し、また、地域の福祉、医療との連携を図ります。

ひまわり保育園の園児とショートステイのご利用者が手遊びで交流。世代を超えた笑顔が、やさしく広がる時間。

緑樹会の試み
Case 1

地域の“困りごと”を障がいがある方が解決。“三方よし”の仕組み

笛吹市の柿農園で援農活動。ご利用者が力を合わせることで、地域の仕事に貢献し、充実した時間になっている。

緑樹会が拠点を置く山梨県北杜市は、長野県に隣接する自然豊かな地域。北杜市は、水が綺麗なことから蕎麦やウイスキーの産地としても知られ、夜には日本一ともいわれる美しい星空が広がる。一方、人口減少と生産年齢人口の減少、一人暮らしの高齢者人口の増加という課題が進んでいる。

関連施設が同じ敷地内に集約され、事業所間の連携がとりやすいのが大きな強み。その連携を象徴するのが、2015年に立ち上げられた「地域支援室」の取組。地域に根ざした事業を展開するため、地域支援室を開設し、地域住民向けのイベントや出張講座の開催に加え、「地域の困りごと支援」を実施している。

地域の困りごと支援では、高齢の方から「庭の草を刈りたい」「電球を替えたい」といった、行政サービスではカバーしきれない「ちょっとした困りごと」が寄せられる。すると、職員が現地を訪問して、相談内容を確認。緑樹会の障がい者支援施設のご利用者の仕事になるかどうかを判断し、マッチングを行う。

このマッチングには専従職員を配置している。担当の職員は、高齢者デイサービスの管理者を経験後、障がい者支援施設へ異動し、地域支援室長に着任した。高齢者と障がいのある方、それぞれに慣れており、特性も把握している。双方の事情に精通しているからこそ、無理のない最適なコーディネートが行えている。「緑樹会に頼むと本当に助かる」と、ていねいな仕事ぶりが口コミで広まり、いまではリピート率9割、スケジュールがすぐに埋まるほど人気となった。

また、この機会が地域の方がたとご利用者のよい交流にもなり、地域の方からの「ありがとうね」という言葉がうれしくて、「また来ますよ」とやる気につながっている。感謝の言葉と人との交流の機会が、ご利用者自身の生きがいをつくっている。

「法人の評判が地域に根づけば、事業の安定にもつながります」と石井理事長は語る。こうして地域支援室の取組は、地域のちょっとした困りごとを解決し、ご利用者のやりがいに結びつくとともに、法人の広報活動にもつながるという三方よしの仕組みとなっている。

家具移動もテキパキと行って、独り暮らしの高齢者サポートを。ちょっとした困りごとに対応することで安心して暮らせる地域に。

明野町で生活用水の補充をサポート。「足場が悪くて困っていた」という住民の声にも、柔軟に寄り添って対応している。

緑樹会の試み
Case 2

高齢者の社会参加の機会づくりと介護予防に貢献する“無料買い物支援バス”

買い物支援には明山荘のマイクロバスを使用。中型免許を持っている職員が安全運転で送迎を担当している。

北杜市の住民が利用するショッピングモールは、隣接する韮崎市などのエリアにあり、車で30分ほどかかる。高齢者にとっては不便であり、日々の買い物が困難になっていた。

緑樹会がこの地域課題の解決に乗り出したのは、ある住民の声がきっかけだった。緑樹会が小規模多機能型居宅介護事業所を新設した際、地域住民にご利用者が施設のバスに乗ってスーパーマーケットへ買い物に行くという活動内容を紹介する機会があった。すると地域の高齢の方から「もう運転が心配だから、自分も買い物支援バスに乗れないだろうか？」という話がでたという。そんな住民のニーズをくみ取る形で月2回、「買い物支援バス」を運行する取組がはじまった。

当初は、施設のご利用者とその方がバスに一緒に乗り込む形でスタート。次第に口コミが広がり、すぐに満員になるほどの人気となり、現在は、ご利用者向けの便と地域住民専用の便を分けて運行している。

気軽に利用してもらいたいという理由から参加費は無料。法人の地域貢献活動として行っている。

さらにこの取組のメリットは、車内で会話が飛び交う「地域の交流の場」にもなっていること。「バスに乗ってからショッピングモールまで、行き帰りの乗車時間を合わせると1時間くらいあります。そこでワイワイ会話が盛り上がるんですよ」と石井理事長は語る。出発時には「今日は何を買う予定？」、帰りには「こんなものを買ったよ」と楽しそうに話が弾んでいる。

「他者との会話や外出の機会は、高齢者の介護予防にもつながっています」と石井理事長。

地域住民の声を聞き逃さず、ニーズに応えたことで、買い物支援バスは、単なる移動手段を超えて、地域住民の社会参加の機会を生み出しているとともに、いまや地域の暮らしに欠かせないインフラとなっている。

歩行が不安な方には車いすを用意して対応している。安心して買い物ができると好評で、地域の高齢者の楽しみになっている。

それぞれが行きたいお店に向かい、お買い物。地域の方がた同士で談笑しながら買い物を楽しんでいる。

緑樹会の試み
Case 3

祭りを彩る“アジアン食堂”地域住民と外国人職員がつながる異文化交流

各国の民族衣装に身を包んだ外国人職員が、アジアン食堂で接客。
色鮮やかな姿が夏祭りに華を添え、地域との交流を深めた。

緑樹会が施設を身近に感じてもらうために行っている取組の一つが、コロナ禍を経て6年ぶりに再開された「緑樹会　夏祭り」。近隣住民には食券を配布し、さらに地域内にある喫茶店や焼き鳥屋を営む方たちにも積極的に声をかけた。「法人が利益を保証することで、地域事業者も安心して参加できる仕組みを整えました」と石井理事長は語る。

2025年の夏祭りでは、新たな試みとして「アジアン食堂」を企画。背景には、外国人職員への思いがあった。

「緑樹会では、インドネシア、ネパール、ベトナムなど多くの外国人職員が活躍してくれています。北杜市は、交通面が不便で、車をもっていないことが多い外国人職員は外出の機会が少ないことが気がかりでした。そこで地域の方がたと交流する機会をつくりたいと思い、イベントへ積極的に参加できるように工夫しました」(石井理事長)。

外国人職員に「皆さんの国のお祭りでよく食べるものを出してくれないだろうか？」と相談したところ、「ぜひやりたい」と皆が意欲的に賛同してくれた。

当日、外国人職員は華やかな民族衣装を身にまとって屋台に立ち、「これはどんな料理？」「日本の焼き鳥みたいなものですよ」など会話を交わしながら祭りを楽しんだ。メニューは法人の栄養士が調理工程や衛生管理をサポートして、インドネシアの焼き鳥「サテ」、ネパールのお酒のおつまみにもなる「かき揚げ」、ベトナムのお餅が入った冷たい「ココナッツシロップのデザート」が並んだ。それぞれの料理には説明書きを添えて、地域住民が分かりやすいように工夫。とくに50個限定だった「ココナッツシロップのデザート」は人気を集め、あっという間に売り切れた。

屋台での何気ない会話が、地域住民と外国人職員の距離を縮め、顔を知ってもらうきっかけとなり、参加した地域の方がたにもそれぞれの国の雰囲気が感じられてとても楽しかったと好評を得たという。

今後はさらにお互いの信頼関係を深めるきっかけづくりをして、何かあれば気軽に相談してもらえる地域との関係性を築いていきたいと考えている。

花火師の資格を持っている職員が手がけるナイアガラ花火。間近で見る迫力は圧巻で、夏祭りの大人気企画の一つ。

6年ぶりの夏祭りでは、地域の皆さんが集い、出店やステージ企画で大いににぎわった。

緑樹会の試み
Case 4

平時からの協力で災害時に備える消防団との連携訓練

防災訓練では、役割分担をはっきり決め、正確な情報を確実に伝達できるように報告体制をつくっている。

緑樹会は地域の消防団と災害時の支援協定を結び、実践的な備えとして協働で訓練を実施している。

石井理事長は、「いざ災害が起きたときに、消防団員が施設のどこに階段があるのかも分からなければ、支援協定の意味がない」と話す。そうした考えから、実践を意識した地域の消防団と連携した防災訓練を定期的に実施している。訓練は、多くの団員が参加しやすいよう、土曜日の午前中などに設定し、訓練当日は、初めて施設を訪れる団員に向けて建物の構造や居室の配置を説明し、そのうえで避難誘導に加わってもらう。普段の施設の様子やご利用者の日常を見学してもらうことで、緊急時の対応をより具体的にイメージできる訓練につなげている。

こうした災害時への高い意識は、県外で発生した大規模災害への支援にも向けられている。2024年の能登半島地震では、発災直後の1月7日から医師や看護師を石川県の避難所に派遣した。その後も県の要請に応じて、職員が1.5次避難での支援にあたるなど、医療と福祉の両面から継続的に力を注いだ。

東日本大震災や熊本地震の際にも、職員を派遣した実績があり、地域を越えて災害支援に取り組む体制が根づいている。

「支援要請の案内を法人内に出すと、『行きます！』と手を挙げてくれる職員がいます。送り出すほかの職員たちも『施設のことは私たちに任せて。がんばって』と一丸となって支えてくれる風土が当たり前になっています。今後、さらにさまざまな地域の声に応えていくためには、職員の自主性を育てること、それに伴う専門性も必要だと考えています」(石井理事長)

法人では2024年から新たに「研修部」を設置し、職員一人ひとりに合った研修を年2回実施する仕組みを整えた。本人が希望する研修と、上司が必要だと判断する研修を組み合わせることで、職員それぞれの力を着実に伸ばしていく仕組みをつくっている。

自身で考え、率先して行動できる人材を育て、日頃から地域との連携を重視した実践に取り組むことで、信頼される存在として地域とともに未来を築いていける法人をめざしている。

法人理念「一人一人のために」という理念に立ち返り、若手職員が意見を交わす時間。日頃の支援を振り返り、お互いに意見を出し合うことでよりよい実践へとつなげていく。

外国人職員のために、法人が日本語研修を準備。一人ひとりの習熟度に寄り添うオンライン研修を行っている。